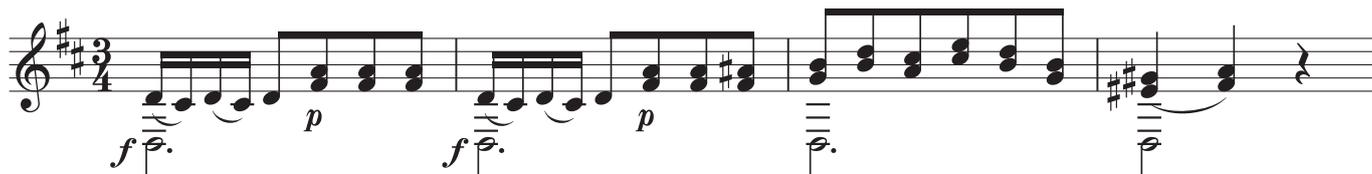


ギター譜のスラー



上記の楽譜はフェルナンド・ソル (1778 ~ 1839) 作曲のメヌエットの冒頭部分です。初版は多分 1822 年頃とされますが、そのファクシミリを Finale で再現してみました。

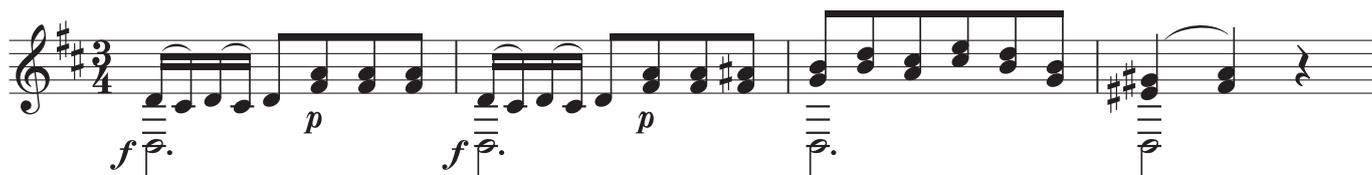
楽譜制作を仕事しておられるプロの方なら、一目で何かおかしいと思われるでしょう。この楽譜のスラーは一般的な浄書の原則を無視していますが、当時の彫版師からつい最近までの手作り浄書職人に至るまで、彼らはギター譜のスラーの大多数をこのように付けてきました。

ギターにとってのスラー表記はレガートに弾くということ以上の意味を持ってきたからです。一般にギタリストはこのようなスラーを目にする時、後続の音をタッチしません。右手で弾くのではなく、左手の指で弦を叩くか弾くかするのです。

その奏法は必然的にレガートになりますが、同時に好ましい音色の変化をも醸し出します。

左手の最初の難関となる技術ですが、音量や音色の変化をも問題とする時、熟練者といえども良いスラーを常に実現するのは困難です。その意味でギタリストの技術を明らかに示すものの一つです。

おそらく、このスラーの付け方はソルの時代からの作曲家・ギタリストの注文によるものでしょう。では何が浄書原則と異なるかと言えば、それは下記の譜面に明らかです。Finale の使い方を少し覚えて、デフォルト設定のまま楽譜を作れば、スラーはこのように符尾側に付きます。悪くはないでしょうが、ギタリストがそれを好まなかったことも事実だと思います。



スラー表記の原則は、符尾が上向きでも下向きでも符頭側に付けることが一つ。上向きと下向きが混在する場合は音符の上側、つまり上にふくらむように付けることが一つ。そして本例のような 2 声の楽譜の場合は、無条件に上声は上、下声は下に付けるというものです。

Finale のデフォルト設定は良く出来ていて、その原則に適うようなスラーがまず出てきます。けれども、それは原則であっても鉄則ではありません。リストやショパンから現役音楽家の新作に至るまで、特にピアノ譜において原則破りのスラー表記を私は数多く用いて納品してきました。原稿となる欧州の彫版楽譜の表記を尊重することが一つ。楽譜に詳しいクライアントの注文によることも一つ。時に自分なりに演奏者にとって分かりやすい表記を考えることもありました。

この操作は実に簡単で、変形図形ツールを選び、メニューバーから「方向」を出して変えるだけです。通常は自動になっているはずですが、これが浄書原則通りの配置になるように

工夫された設定というわけです。それはそのままにしておいて変えたいスラーを選択してからのショートカットが最も速い操作で、Command+F「Win は Ctrl+F」となります。F とは Flip のことで、指ではじくといった意味です。曲線の頂点をはじき飛ばして逆方向に向かせるということでしょう。

楽譜浄書のルールと共に、楽器によって異なる伝統もあるわけで、例えばフルート譜では 8va 表記は好まれなとか、バイオリン譜ではボーイング表記は五線の上といった事柄と同じで、ギターのスラーは原則として符頭側と言えます。

ただし、この伝統にも問題はあります。スラー奏法によらずともレガートに弾く事が出来るのにも関わらず、それを表す術を無くしています。下記の楽譜が一つの解決法で、点線でスラー奏法を表記して、一般的なアーティキュレーションとの混同を避けるアイデアです。出版譜に少しの例もありますが、私は自分の楽譜で多用しています。

2007 年 3 月 梅本雅弘

